日本獣医動物行動研究会
Japanese Veterinary Society of Animal Behavior
News Letter
ニュースレター
No.23
2022.12発行
http://vbm.jp

The Interview! : 海外のケースレポートからの学び

『猫のトイレの外における排尿および同居猫との争い』

今回は海外のケースレポートを題材として、そこからどのような学びが得られるかをフリッツ吉川綾先生にご質問させていただきました。質問者は、小澤真希子先生です。
実際の文献につきましては、以下をご参照下さい。

■ JAVMA Sep1,2020. Vol257.No5.p493-497
Animal Behavior Case of the Month
M. Leanne Lilly DVM
(https://avmajournals.avma.org/view/journals/javma/257/5/javma.257.5.493.xml)
■ケースレポート概要
7 歳、不妊済み雌の猫の不適切な場所での排尿行動について。随伴症状として、繰り返される血尿が見られ、ストレス因子として引っ越しや飼い主の旅行、同居猫からの攻撃などが疑われた症例。

小澤先生（以下、小澤）：まずは、ケースレポートを読まれて、先生はどのような感想をお持ちになりましたか？

吉川先生（以下、吉川）：このようなレポートを読むことは、レポートの書き方を学ぶ上で、自分にとっても認定医を目指す先生方にとっても勉強になると思いました。診断に必要な状況、飼い主の対応、猫の行動学的情報がしっかり記され、論理的に説明されています。
症例としては、医学的な問題と行動学的問題が併発していること、飼い主の生活に合わせて治療を工夫している点で、実際の臨床現場でよくあるパターンだなと思いました。例えば治療ですが、飼い主の希望や生活をまもる為に SSRI の使用ができない、環境エンリッチメントに制限があるなど、猫にとっては最善の策がなされているとは言えないケースだと思います。

小澤：そうですね、文献には、飼い主が行動診療科からのフルオキセチンの提案に同意しなかったことや、不適切な排泄によって飼い主と猫の絆を損なわないために治療開始当初は飼い主がそれまでしてきた「症例猫をバスルームに閉じ込める」という対処を継続したことが書かれていますね。バスルームが 20 フィート (約 6m) もあるので狭くはないのかもしれませんが。

吉川：行動診療は飼い主や動物、状況などの事情で様々な制限がある中でも、ポイントはおさえて着実に改善させられるように、自分のもつ引き出しから方法を探しながら治療をすすめます。これもそういう症例 の一つだと思いました。

小澤：この症例は 2 歳頃から症状が出て、7 歳のときに行動診療科を受診していますが、これについてはどう思われましたか？

吉川：これも、もっと早い時期に行動学的診断と治療が一部でもできていれば、猫も飼い主さんもこんなに苦労しなかっただろうなと思いました。一般臨床の先生たちがなかなか行動診療に繋ぐことができなくて、長いこと症状をマスクするような治療をしてしまっています。

小澤：行動診療科初診の時点で、飼い主が猫を手放すか安楽死することを検討していたことが書かれていましたね。

吉川：もっと早い段階で行動診療科を受診できていたら飼い主も手放すかどうかまで考えずに済んだのではないかと思います。経験的にも、症状が出てから治療開始までの時間が長い症例では、動物の問題行動だけでなく、飼い主の気持ちも複雑になり、治療に苦労することが多いと感じます。

小澤：実際の臨床現場では本当に色んなケースがありますよね。教科書的ではないケースと理解して読むことが、また勉強になりますね。

旅行や引っ越し、避けられないイベントについて

小澤：この症例では家族の旅行 (不在) が症例猫のストレスの１つと考えられていたにも関わらず、フォローアップ中に家族が旅行に行ってしまい、血尿や嘔吐が生じるというエピソードもありました。
飼い主の中には「猫は一泊ぐらい置いていってもいいんだ、ご飯を山盛りにしとけばいいんだ」と思っている人も多くいるように感じますが、やはりストレスになりますよね。だからといって一緒に連れていってもストレスですし、ペットホテルに預けてもストレスになる。猫の飼い主が旅行する際に、何かアドバイスできることはありますか？
吉川：家に置いていくのであれば、猫にとって旅行中の家の環境やケアが、できるだけ快適になるよう、いつも以上に考えてあげることが大切だと思います。留守中も危険がなく、心身の負担が大きくならないために動物福祉の『5 つの自由』を満たせる環境を与える計画が必要です。さらに、『5 つの柱 ※』をもう一度丁寧に見直すと改善できるところが見つけやすくなると思います。
※ AAFP and ISFM「猫にとって快適な環境づくりのためのガイドライン」
小澤：旅行中の十分なケアのためには、ペットシッターに来てもらう方法もありますね。その場合には、まずペットシッターに馴らすことも必要ですね。
吉川：そうですね、臆病な猫にとっては見知らぬ人の足音１つでも大きな負担になるかもしれません。さらに、ペットシッターさんに、事前に留守中のケアの内容だけでなく、各々の猫の性質や行動特性についてよく理解してもらうことも大事です。
小澤：他にはどんなことができるでしょうか？
吉川：個々の猫にあった対策も必要だと思います。例えばこの症例の猫の場合には、旅行中の何が一番ストレスなのかが気になりました。飼い主の仲介がない状況では猫同士の社会的問題が悪化しており、飼い主の不在による不安や社会的交流不足によるストレス、留守中に何らかの苦手な刺激があったなども考えられます。猫それぞれについてストレス要因として考えられる事を明らかにし、１つ１つに対策をとっておきたいですね。
小澤：そうですね、旅行のストレスといっても、そこには様々な要素がありますよね。ストレスと言えば、この症例では受診までの経緯の中で２回の引っ越しがあったことも書かれていましたね。
吉川：この症例では、引っ越しのたびに尿マーキングや特発性膀胱炎が生じていました。引っ越しは荷物の整理などで慌ただしい大変なイベントですから、動物はどさくさに紛れて連れていかれてしまい強いストレスとなることが多いのではないかと思います。
小澤：我が家も去年、引っ越しをしたのですが、引っ越し業者側は効率を求めているので結構要求が多くて、制約の多いイベントだなと実感しました。それでも荷物の引っ越しはバタバタしたとしても、動物だけは別にして丁寧なお引っ越しが必要ですね。
吉川：そうですね。キャリーへの馴化や薬物療法など、動物目線で対策してあげたいですね。ストレスを感じやすい動物については、是非事前に行動診療科に繋いでいただきたいです。プラクティショナーの先生方にもそんな仕事を担っていただきたいと思います。

猫のコマンドトレーニングについて

小澤：今回の症例では、症例猫と同居猫との間で同種間攻撃行動があり、この社会的緊張が問題行動の要因の１つと考えられたため、解決策としてコマンドで猫たちが各々別の決められた場所に行くようにするトレーニングが実施されていました。この点について先生が感じられたことを教えて下さい。
吉川：「猫にはコマンドトレーニングは難しい」という意識がまだまだ、特に飼い主側に、あると思いますが、このケースレポートを見て、簡単なコマンドを楽しみながらやっておくことは、やはり行動修正法の基礎としてプラスになるな、と思いました。
小澤：先生が実践されている中で、猫ならではのコツはありますか？ぜひ教えてほしいです。
吉川：犬とのトレーニングは「人と一緒に作業をするのは楽しい」と教えることを通じて信頼関係を作っていくことが大事だと思いますが、猫は「どう楽しくやらせるか」がポイントだと思っています。猫に強要するのは難しいので、猫のペースで短時間ずつ、を意識しています。
小澤：圧をかける方法は絶対うまくいかないです

よね。もちろん、犬でも圧をかけるコマンドの出し方は弊害がありますが…。
それから、猫がやりたくないと思っているときに指示をしても動かないですよね。非両立行動として指示を出すのであればモチベーションが発生する前じゃないと難しいですね。今回の症例では「特定の場所に行く」という指示で猫同士を離れさせていますが、多分すごく早いタイミングで、喧嘩になるだいぶ前に「離れろ」を出しているのではないかと思いました。コマンドトレーニングさえすれば何でも制御できるというわけではないですよね。
吉川：そうですね、猫は「いつでも人間がして欲しい時に」というレベルにまで持っていくのは難しいと思っています。
小澤：猫のトレーニングですが、先生はクリッカーは使われていますか？
吉川：クリッカーは、猫は犬以上に良いな、という感覚を持っています。ご褒美に使っていくのがトリーツだったりすると、猫はトリーツをタイミング良く与えるのが難しいので、クリッカーは役に立ちますね。
小澤：私も猫では、よくクリッカーをお勧めしています。猫は言葉で褒めることのメリットが少ないと感じていて、犬であれば褒め言葉は声のニュアンスなんかにも報酬効果があると思うのですが、猫ではそれは 期待できないかな、と。もちろんゼロではないと思いますが。強化子は伝わりやすさが第一ではないかと考えています。
吉川：そうですね。個人的には、犬は強化子に飼い主の言葉や笑顔を使うことで、日々の生活でのコミュニケーションが深まり、飼い主自身への信頼を高める効果も期待できると思うので、簡単なコマンドの時には言葉で褒めてもらうことが多いです。そして、より複雑な指示を教えるときにクリッカーを使ってもらうことがあります。一方、猫では簡単なコマンドでもクリッカーを使っています。
小澤：猫のクリッカートレーニングですが、非両立行動分化強化を行うとき以外にも実施されていますか？例えばコアカリテキスト『臨床行動学』のコラム欄に尾形先生が、飼い主との距離を縮めるためにクリッカートレーニングを用いたケースをご紹介くださっていますが。
吉川：認知的な関わりが好きな猫もいますので、遊びの一環として使っていくのも面白いかもしれません。近年では室内のみで飼育することが主流となり、「暇」というストレスを抱えた猫が多いことを感じます。社会的、認知的エンリッチメントとしてもっと取り入れていきたいと考えています。
小澤：色々と可能性を秘めていますよね。ただ犬ほどスムーズにはいかないので、飼い主が挫折しやすい印象もあります。
吉川：やっぱり猫は、簡単なことからが良いですね。

薬物療法について

小澤：今回の症例では、行動診療科受診前にかかりつけ医からアミトリプチリンやフルオキセチンが処方されていて、どちらも改善に至らず中止した経緯がありました。そして行動診療科から改めて SSRI が勧められましたが、飼い主が希望せず、ガバペンチンとロラゼパムが使用されました。この点については、先生はどう思われましたか？
吉川：筆者はフルオキセチンを増量しての投与を勧めているにも関わらず、飼い主の希望で使用ができませんでしたよね。飼い主が SSRI を使いたくないと言ったのは、過去の使用経験から効かないと思い込んでいたのかもしれません。過去の治療でアミトリプチリンを 1 ヶ月、フルオキセチンを 2 ヶ月使用していますが、これでは効果が出てきたところで終了という状態になるため、残念だなと思いました。中途半端に使用した結果、せっかく効果のあるものが使いたいときに使えなくなってしまったのではないかと。
実際に私が診察したケースでも、過去に SSRI を頓服として、または 1-2 週間だけ使った経験があり、効果がなかったとおっしゃる方は少なくありません。それでなくとも、猫の飼い主は長期的投与の必要な薬物は早急な効果がある薬物よりも受け入れが難いという論文もあり、SSRI などは受けが悪いことは頭に入れ ておかなくてはいけないと思います。
薬物療法は処方する獣医師がその期待される効果や副作用、使用上の注意をきちんと理解しておかなければならないのはもちろんですが、それを飼い主に十分説明してから使用することの重要性を再認識しました。

吉川先生、小澤先生、非常に勉強になるインタビューをありがとうございました！

獣医行動プラクティショナーを紹介

2021 年 9 月に実施されたプラクティショナー試験に合格された７名の先生をご紹介いたします。

動物病院名	動物病院所在地	獣医行動プラクティショナー名（敬称略）
ぱれっと動物病院	宮城県仙台市若林区若林	副島　美穂
大田中央動物病院	東京都大田区中央	前泊　美希
中川動物病院	東京都西東京市新町	松本　真美
フィル動物病院	神奈川県横浜市青葉区つつじが丘	松本　真美
新安城どうぶつ病院	愛知県安城市東栄町	稲垣　恵理子
西向日動物病院	京都府向日市上植野町下川原	安田　行子
スージー動物病院	大阪府冨田林市若松町	中筋　美岐
もみの木動物病院	兵庫県神戸市灘区泉通	野村　真優子

会員の窓

会員の日々を切り抜いて自由にご発信をいただく「会員の窓」コーナー。今回は、武田繁幸先生から➡ ALLONE 動物病院の礒見優先生にバトンが渡りました！

みなさんと一緒に暮らす犬たちの趣味は何ですか？自分の犬との楽しみや、行動診療における手法の一つとして様々な趣味をお持ちかと思います。今回は私が楽しんでいる「ノーズワーク」について紹介させていただきたいと思います。

ノーズワークは『犬が嗅覚を使い隠れているものを見つける活動』と定義されており、配置した段ボール箱からオヤツを探す遊びや、特定の匂いを付けた綿棒を探し出す遊びなど、いろいろな方法で楽しまれています。自分のうちの子が人には全く分からない匂いを探し出す姿は、尊敬の念を抱き誇らしさを感じます！

犬にとって嗅覚は採食行動や社会行動に用いられる最も重要な感覚と考えられており〔1〕、嗅覚のエンリッチメントはストレス関連行動を減らし QOL を向上させることが示唆されています〔2〕。ノーズワークも嗅覚を用いた犬本来の採食行動に類似している点と、犬の自発行動が強化される点で、犬の QOL を向上させ情動状態を改善させると考えられています〔3〕。その他にシニア犬や視覚障害を持つ犬、不安傾向のある犬などに対しても導入しやすいことも利点として実感しています。そのため動物病院で実施する利点が多く、一緒にインストラクター資格を取った先生方と共に動物病院関係者向けのセミナーなども行っています。興味があれば是非声をかけて下さい！

ノーズワークに限らず、多くの方が動物との生活を一緒に楽しめることを願っております。

ALLONE 動物病院　礒見優

〔1〕Horowitz, A: Being a Dog: Following the Dog Into a World of Smell. Scribner, New York (2016)
〔2〕Binks, J, Taylor, S, Wills, A, Montrose, V.T: The behavioural effect of olfactory stimulation on dogs at a rescue shelter. Appl. Anim. Behav. Sci. 202, 69–76, 2004
〔3〕C. Durantona, A. Horowitzb: Let me sniff! Nosework induces positive judgment bias in pet dogs. Appl. Anim. Behav. Sci. 211, 61-66, 2019

礒見先生、ありがとうございました！
次はあなたにバトンが届くかも…。
バトンが回ってきた際はどうぞ楽しんでお引き受けください。

行動学コラム

認定医の先生に聞いてみた！

No.1　鵜海 敦士先生

新企画！認定医の先生にざっくばらんにコラムをお願いしてしまうコーナーです。
第 1 回は、ぎふ動物行動クリニックの鵜海先生に「診療時のこだわり」について聞いてみました☆

今回コラムをお任せいただきました、ぎふ動物行動クリニックの鵜海です。他の先生方の診療とどのように異なるかはわからない部分もありますが、日々の行動診療の中で心がけていることをお伝えできればと思います。

まず、ぎふ動物行動クリニックは行動診療科専門で対応していますが、具体的には、対面診療、オンライン診療、オンライン相談の形態をとっています。対面診療は主に愛知、岐阜、三重が中心となりますが、さらに遠くから来られる方もいらっしゃいます。特に遠方から来られた方では、継続的な対応が対面のみでは難しい場合もあるため、再診はオンラインにて対応することもしばしばあります。また、診療にお越しいただくことが難しい状況や地域の方に対しては、オンラインでの相談という形で、できる限りの支援を行っています。

診療以外での支援の方法としては、犬を一時的に預かることによって、家族の精神的な安定を図ったり、家庭に戻る前に行動修正を少し行うことで家族が適切に対応できるようにしたり、といった方法もとっています。

さらに、しつけ教室（ONELife）を併設しているので、パピークラスや成犬クラス、ノーズワーククラス、プライベートレッスンなども行っており、トレーナーと連携しながら問題行動に対しての支援を行っています。

これらの支援を行う中で特に大切にしていることは、相談症例のご家族と確かな深い信頼関係を築くこと、そして様々な対応の選択肢がある中で、ご家族が一番納得できて現実的に実施できる治療法をご家族と一緒に選択する、ということです。

やはり家庭ごとにかけられるコストや実施できること、現実的には難しいことなどが、それぞれ大きく異なるため、そのご家族のニーズがどの程度のもので、症例動物との間においてどこまで進めていけるか、経過を追いながら相談を重ねていくことが大切だと感じています。

経過を追うということについては、当院では LINE を活用したフォローを行っており、困ったことや相談したいことなどがある場合に、いつでもご連絡いただけるようにしています。

行動診療科は基本的に予約制となってしまうことから、何かあった場合にも突然来院してすぐに相談することが難しいこともあると思います。その点、LINE などの SNS の活用によって、飼主にとっては予約しなくてもいつでも相談できるという安心感が得られ、我々にとっては問題が起きた場合の早急な対応の指示手段となり、非常に有用です。使い勝手も良く、信頼関係を構築するのに役立つツールだと感じています。

また、これは自分の良い面でもあり悪い面でもあると思いますが、どんな症例に対しても一切手を抜かずに診療にあたるという点が、自分が大切にしているもうひとつのことです。

飼い主さんは、大なり小なり困ったことがあってご相談にこられているため、相談前よりは相談後の方が気持ちがスッキリされるように、症例動物とともに前を向いて生活を送れるように、一生懸命お話することを常に心がけています。

逆に、自分とお話しされても気持ちが楽にならなければ、そこから治療に入っていくことも、継続して再診にきていただくことも難しくなると思いますので、引き続きアドバイスを受けたいと思っていただけるような立ち振る舞いを心がけています。

抽象的な表現が多くなってしまったため、参考になるかはわかりませんが、以上が自分が日々の診療の中で大切にしている部分になります。

LINE はフォローアップで動画を送っていただくときにも便利ですよね。
「一切手を抜かない」、これは認定医への道のキーワードかもしれませんね、…メモメモ。
鵜海先生、ご多忙の中、素敵なコラムをありがとうございました！

広報委員会からのお知らせ

今年も 10/11 ～ 10/17 に、日本獣医動物行動研究会 Facebook グループへの参加キャンペーンを行いました。

キャンペーンを経て、56 名の新規参加をいただき、現在メンバー数 204 名となりました。

この機会に、本会の Facebook グループについてご案内させていただきます。

Facebook グループは研究会会員限定のグループであり、承認された方のみご参加いただけるプライベートグループです。従って通常時は検索不可となっております。参加者の追加については広報委員の方で管理させていただき、会員数の増加に応じて今回のように参加キャンペーンの期間を作り対応させていただいております。

先生方によりよくご活用いただくために、右記のようなガイドラインを設けておりますので、ご確認の上、ぜひ活発にご発信ください。

●フェイスブックグループは、日本獣医動物行動研究会のメンバー限定のグループです。
●研究会メンバーに有用と思われる情報をどしどし上げてください。具体的には、お勧めの書籍、HP、ブログ、セミナー、テレビ番組の紹介など。個人の活動の宣伝も歓迎いたします。
●「皆さんどうしてますか？」「○○の情報持ってる方いませんか？」のような質問、楽しい話題や悩みなどの共有の場としてもご活用ください。
●研究会内の交流の活性化も目指しています。メンバー間でのオンライン交流会や勉強会の企画告知にもご活用ください。
●症例相談は、SNS で文章のみでは限界があると思われますので、この場では行わないでください。研究会公式の症例相談 (有料) あるいはオンラインの交流会・勉強会などをご活用ください。
●当グループの発信内容については日本獣医動物行動研究会が保証するものではありませんので、ご自身の責任でご活用ください。

事務局からのお知らせ

先般は、会費決済システム Miit ＋の導入にご協力をいただきまして誠にありがとうございました。会員が 380 人を超える状況となり、会員管理を円滑化し、事務局負担を軽減することを目的として導入を致しました。ご理解の程、何卒宜しくお願い致します。

▶ 2023 年度会費より支払い方法が変わります

2023年度の年会費から Miit ＋を経由した決済となります。決済方法の詳細につきましては、改めて年始にメーリングリストにてお知らせいたします。

▶支払い方法について

クレジットカードのみの対応となりますので、会員の皆様にはご不便をおかけするかと存じますが、何卒、ご協力の程よろしくお願いいたします。

▶セミナー等の支払いについて

教育セミナーの支払いや、症例相談の支払いについても、Miit ＋決済となる予定です。一部 peatix を利用する場合もございます。